

裏切者ユダ

[聖書]マタイによる福音書26章14～25節

ユダ、裏切りを企てる

そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行き、「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」と言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。そのときから、ユダはイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。

過越の食事をする

除酵祭の第一日に、弟子たちがイエスのところに来て、「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」と言った。イエスは言われた。「都のあの人のところに行ってこう言いなさい。『先生が、「わたしの時が近づいた。お家で弟子たちと一緒に過越の食事をする」と言っています。』」弟子たちは、イエスに命じられたとおりにして、過越の食事を準備した。夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。一同が食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスはお答えになった。「わたしと一緒に手で鉢に食べ物をもいだ者が、わたしを裏切る。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」

[序] 息づまる緊迫

マタイによる福音書26章から27章のはじめにかけて、主イエスの逮捕前後の様子が簡潔に書き記されています。新共同訳聖書の小見出しを列記してみましょう。

1. イエスを殺す計画
2. ベタニアで香油を注がれる
3. ユダ、裏切りを企てる
4. 過越しの食事をする
5. 主の晩餐
6. ペトロの離反を予告する
7. ゲッセマネで祈る
8. 裏切られ、逮捕される
9. 最高法院で裁判を受ける
10. ペトロ、イエスを知らないと言う
11. ピラトに引き渡される
12. ユダ、自殺する

息づまるような緊迫感が伝わってきます。そこで今朝は、聖書教育の教案から離れて、これらの記事から、「ユダの裏切り」に注目することにいたします

[1] 主イエスを引き渡すユダ

ユダヤ教の指導者たちが、主イエスを殺そうと相談を始めた記事は、マタイ福音書では既に12章14節に出てきます。10章で12使徒が選ばれ、11章で使徒たちが方々の町に遣わされて宣教を始めます。それに次ぐ12章なので、主イエス・キリストとして宣教活動を始めて程なく、指導

者たちから**危険人物**視されて、抹殺せねばと思われるようになったことが分かります。

そして26章に至って、いよいよその動きが**最終段階**に達しました。3節をご覧ください。祭司長や長老たちが大祭司の屋敷に集って相談し、過越しの祭が終り、地方から集まって来た群衆が引き揚げたら、イエスを捕えて殺そうということになりました。一方主イエス自身は**ご自分の最期**を、「二日後の**過越し祭**で十字架につけられるために、引き渡される」(26:2)とみておられます。そしてユダヤ教の指導者達の計画に反して、**主イエスのお言葉通り**になりました。そうなのは、イスカリオテの**ユダの行動**によってでありました。

こともあろうに、弟子団の中核をなす12人の**使徒**の一人ユダが、祭司長たちのもとに来て、「どのようにしてイエスを引き渡そうか」と相談を持ち掛けてきたからです(ルカ22:4)。祭司長たちは願ってもないことだと喜び、彼に**銀貨30枚**を支払うことにしました(26:15)。

日が沈んで除酵祭の二日目が始まると、主と12人の使徒たちの**過越しの食事**が始まりました。そして食事の最中に第一回の**主の晩餐**も行われました。その後でユダは抜け出して、ゲッセマネで**祈る主イエス**の所に追っ手を案内して来ます。こうして主イエスは**逮捕**され、最高法院で裁判を受け死刑の判決が下り、夜明けとともにローマ総督ピラトに廻されました。わずか一日の出来事です。

[2] ユダの理由

聖書では、**裏切る**という語は、「裏切る」という訳では24回ですが、**引き渡す**、**渡す**、**売り渡す**という訳では58回も使われています。裏切るという**内容**がよくわかりますね。ユダはどのようにして、主イエスを殺そうと狙っている**敵**の手に、主を引き渡すという裏切り行為をしたのでしょうか。彼は主イエスが徹夜の祈りの後でお選びになり、3年間も生活を共にして教育訓練を受けた**特別な弟子**、12人の**使徒**の一人なのです。そのユダが、**どうして敵の手に主イエスを引き渡す**という裏切り行為をしたのでしょうか。ユダの裏切りについて、人々があげている**大きな理由**が三つあります。

- I. **金の魔力に負けてしまった。**
- II. **主イエスに幻滅して、尊敬が憎悪に変わってしまった。**
- III. **自分の期待する誤ったメシア観から。**

I. **先ず金の魔力に負けてしまったという理由です。**

マタイ福音書は、ユダが祭司長たちの所へ行き、「あの男をあなたがたに引き渡せば、**幾らくれませんか**」と言ったと記します。幾らくれるか——ここにユダの裏切りが**金のため**だったとする思いが込められています。

その点ではヨハネの福音書はもっと露骨です。ユダの裏切り交渉の直前に、ベタニア村で、一人の女性が**極めて高価な香油**を、主イエスに全部注ぎかけるという出来事がありました。ヨハネ福音書は12章4節以下にこう記します。

「のちに、イエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。“なぜこの香油を三百デナリオンで売って貧しい人々に施さなかったのか。”彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は**盗人**であって、**金入れ**を預かっているながら、その**中身**をごまかしていたからである。」

ユダは、**会計係**をしているうちに、「**悪魔の餌食**になり、崩れてしまった」というのです。1デナリオンは労働者一日の賃金として支払われる銀貨一枚のことです。労働者300日分以上の賃金で売れる香油が、無駄に使われたと怒りながら、主イエスをわずか銀貨30枚で売り渡し、挙句の果てに自殺してしまうとは、ちょっと信じられないほど**愚かな話**だと思います。

しかし今日でも、永年の役所勤務でそれなりの地位と給与を得ているながら、業者から金を受け取って便宜を図り、クビになって何千万円という退職金も失う**汚職**が絶えない社会です。ユダの取引を愚かだと笑うわけにはいきません。**金にひかれる心理**につけこんで、人間の心をむしばみ、有能な人間でも愚か者にしてしまう**悪魔の仕業**の恐ろしさを示す**最悪の事例**、ということになりましょうか。

II.次に、主イエスに幻滅して、**尊敬が憎悪**に変わってしまったとする理由です。

ベタニア村で、一人の女性の許しがたい浪費を、主は「わたしに良いことをしてくれたのだ」と彼女をかばっただけでなく、「この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを**葬る準備**してくれた」とすらおっしゃいました。この言葉が、ユダに裏切り行為を起こさせたというのです。

「この先生が死ぬ？ **メシア王国**を打ち建ててくれるのではなかったのか。では誰が救い主なのか。この人を崇拜して、すべてを投げうって従ってきた。それなのに、「苦しみを受けて死ぬ」とおっしゃる。ペトロがいさめたら「サタン、引き下がれ」と叱られた。そして「**今や、葬式の準備だ**」と言う。この人は本当に**死ぬ気**なのだ。もう我慢できない。この三年間は一体なんだったのか！」

自分たちの期待が裏切られて、青春が踏みにじられたという思いが、一挙に噴き出て来て**尊敬**が**幻滅**に、そして**憎悪**に変わり、**敵に売り渡す行動**に駆り立てられていった、というのです。

III.第三に、自分たちの期待する**誤ったメシア観**からの**行動**、とする理由です。

ユダは、主イエスが**神のメシア(救い主)**だと信じていました。でも主は、彼が期待する行動になかなか立ち上がって下さらない。そこでのっぴきならない状況に立っていただいたら、いよいよ**メシア**としての**行動**を開始されるに違いないと信じて、**敵の手に委ねた**というのです。

I、IIの理由では、**ユダ自身**が**自殺する理由**がよく説明できないけれども、IIIだと、ユダは自分の失敗、即ちメシアに対する自分の思惑が間違っていたことに気付かされて、**絶望**のあまりに自殺したということで説明がつくので、IIIの解釈を取る人が多いそうです。

私は、以上のいずれの説もなるほどと思いますものの、その説明だけではなぜ使徒であるユダほどの人が、主イエスを裏切ったのか、よく納得できないというのが、正直な気持ちです。ただ、私たちの身を滅ぼす**悪魔(サタン)**の仕業の恐ろしさには、心底から身震いいたします。

[3]裏切りを見抜いておられる主

では主イエスは、この裏切者ユダに対して、どのような態度で接されたのでしょうか。12人の使徒たちは、主イエスが山で祈って夜明かしをされた上で、弟子たちの中から選んだ**特別な人**たちでした(ルカ6:12)。自分の身近に置いて、特別に教え育ててきた者の中から、こんな情けない人物が出たとなれば、それは選んだ本人の責任であり、自分の**不明の責め**を、自分で引き受けても仕方ありません。

ましてや**全知全能の神**の力を備えておられるキリストです。どうして自分を裏切るユダを使徒に選び、会計係にして身近にお置きになったのでしょうか。しかも主の弟子たちとの最後の食卓で、**爆弾宣言**をしておられるのです。「はっきり言うておくが、あなたたちのうちの一人が、**わたしを裏切ろうとしている**。」(21節)。「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る」(23節)。弟子たちは、**激しい動揺**に襲われました。

主はこの時すでに、ユダが祭司長と取引をしたことを見抜いておられました。そのような**鋭い力**をお持ちだったのです。それなのにどうしてユダを引き止めずに、**するままとされた**のでしょうか。我が子がとんでもない過ちを犯すことが分かれば、親はひっぱたいてでも、縄に縛り上げてでも、そうさせまいとするのではないのでしょうか。

ヨハネ福音書では「“わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった”という**聖書の言葉**(詩41:10)は、**実現しなければならぬ**」とおっしゃり、ユダに「しようとしていることを、**今すぐにしなさい**」とすら、おっしゃっています。そしてその言葉に促されるかのように、ユダはパン切れを受け取ると、出て行ったと記しているのです。

まるで旧約聖書の言葉がその通りに起るために、ユダという人物が必要だった、ユダは神の業の中で**裏切者役として選ばれた**と言わんばかりに読めてしまいます。神は**全ての人**を深く愛し、罪のために滅びることがないようにと、独り子イエス・キリストを十字架におつけになりました。しかしそのためには、救い主を**十字架につける者**が必要です。ユダヤ教の指導者や総督ピラトと共に、弟子たちの中からも、彼らへの**引き渡し役**を働く弟子の一人も必要だったというのでしょうか。

「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る。人の子は聖書に書いてあるとおりに去っていく。だが、人の子を裏切るその者は、**不幸だ**。生まれなかった方が、その者のためによかった」(24節)。主イエスはこの言葉を、**どんなお気持ち**で語られたのでしょうか。皆さんはどのように受け取られますか？

私はこれを、ユダを冷たく突き放す言葉だとは思いません。「ユダ、あなたがわたしを引き渡さなくても、私の十字架の死は起きるのだよ。何もあなたが手をかす必要はない。そんな事をしたら、あなた自身が滅んでしまう。そして生まれなかったほうが良かったと言われる生涯で果ててしまうよ。思いとどまりなさい。止めなさい」。主は心の中でこう叫びながら、愛するユダに語りかけている言葉ではないでしょうか。

[4] 立ち帰れ

昔、神はイスラエルの人々に、預言者エゼキエルを通して語られました。「彼らに言いなさい。わたしは生きている。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか」(エゼキエル33:11)。

ルカ福音書15章「放蕩息子のたとえ」で主イエスが語られた神の愛。大金を持って遠くの町へ出て行く息子を、父は腕ずくで取り押えません。深い憂いと悲しみを持ちながら黙って見送りました。息子が放蕩三昧に荒れた生活をしている時も、金を使い果して困窮の中に飢えている時も、我が家でひたすら帰って来るのを待ち続けます。そして本心に立ち返り帰って来るや、家から飛び出して行って、抱き締めて迎えます。

本心に立ち返るのを忍耐して待つ神、それは私たちの自主自立の人格を限りなく尊重して、言葉に愛を込めて相対して下さっている父なる神だからなのです。愛を込めた語りかけ——そこには、聞く自由と共に、聞かない自由、従う自由と共に従わない自由が許されています。そしてたとえ私たちが神の愛の語りかけに聞き従わなくても、私たちを見限ることなく、変わらぬ愛をもって語りかけ続け、待ち続けて下さり、必ず救い上げてくださる父なのです。

主イエスは十字架にはりつけになりながらも、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか、知らないのです」とお祈りくださいました。そのお方がどうしてユダを冷たく突き放したり、裏切者の役をさせるために弟子の一人に選んだりなさることが、ありえましょうか。「立ち帰れ、立ち帰れ、お前の悪しき道から。ユダよ、どうしてお前が死んでよいだろうか」これが、過越しの食事の時の、主イエスの心の叫びでもあると、私は受け取ります。

ですから私は、ユダはペトロと同じに、期待をもって使徒に選ばれたと信じます。しかしサタンに負けて、主を売りわたす罪を犯してしまいました。これは彼自身の責任です。でも彼はそこで悔い改めて、立ち帰るべきでした。神はそのように呼びかけておられるのですから。しかし彼は主の期待に背いて、自分で自分の始末をしてしまいました。主の赦しを受けようとしなかったのです。そして裏切者の烙印を終世その身に負うことになったのです。

[結]どんな人をも救われる神

主イエスが、「裏切者が居る」とおっしゃった時、弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしではないでしょうね」と代わる代わる言い始めました。これもまた何と**驚くべき反応**でしょうか。誰一人として「自分は違う」と断言できなかつたのです。そうです。「たとえご一緒に死なねばならなくなっても——と弟子たちは皆誓いながら(35 節)、主が逮捕されるや、皆イエスを見捨てて逃げてしまいました(56 節)。ペトロは「お前もあの仲間だ」といわれると「知らない」と三度も嘘をついて、我が身を守りました。「主よ、まさかわたしでは」と言う心配は、その通りになったのです。

「主を裏切ることは断じてありません」と胸を張って言える弟子は一人もいなかった——ユダだけが例外の罪人ではなく、使徒たち皆が、即ち**私たちも皆等しく罪人**なのです。ユダは「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と告白しています(マタイ 27:4)。大祭司の庭から逃げ出して泣いたペトロよりも率直です。でもユダは自殺して果てました。ペトロは生き続けました。この違いは、ユダがペトロのように、主イエスに向かって泣いてお詫びをせずに、祭司長たちに銀貨を返しに行くという形でしか、**自分の深い後悔を現わせなかつた**ところにあると思います。

主イエスは過越しの食事の中で、第一回の主の**晩餐式**を行いました。ペトロもユダも他の10人皆に「取って食べなさい。これはわたしの体である」「皆、この杯から飲みなさい。これは**罪が赦されるように多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である**」。ユダは、自分が裏切者でありながら、なお主イエスに招かれてパンと杯をいただいたこと、「これはあなたの罪が赦されるように流されるわたしの血、契約の血である」とおっしゃる主のお言葉に留まり続けるべきだったのです。

皆さん、あの優しい主イエスを裏切ることほど**大きな罪**はないのではないのでしょうか。しかしそれは、ユダだけでなく、ペトロも、私たちも、皆同じだと、神は見ておられるのです。そして私たち皆を、**主の晩餐にお招きになり**、ユダを含めて皆のために、十字架について肉を裂き、血を流して、死んで下さったのでした。イエス・キリストの十字架の救いに招かれていない人は、一人もいないのです。そして**十字架によって赦されない罪**など、一つもないのです。**どんな人でも救われるのです**。イエス・キリストに救いを求めるならばどんな人でも救われます。今、イエス・キリストに救いを求める**決心**を、なさいませんか。

祈ります:今日も貴方に礼拝を捧げる時をお与え下さって、有難うございました。ユダは主を裏切ってしまった。でも主はそのユダをも深く愛し抜いて、彼を救うためにも十字架についてくださいました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか、知らないのです」この主イエスの祈り、神の愛に包まれている私であることを、深く心に留めて、生きる者にして下さい。感謝しつつ、与えられた今週の歩みをさせてください。殺し合う争い、銃を取って殺し合う戦争をどうぞ止めさせてください。平和をお与えください。救い主イエス・キリストの御名によって、祈ります。

アーメン